

# ON THE SPOT

## 現場から

### ●指導者連携ネットワーク

## チームづくりは人づくり

指導者同士の情報交換など、ネットワーク構築を通してコーチの地位向上を目指し、2005年に発足されたスポーツサポート機構（以下、SSO）。去る8月20日に、第3回目となるセミナーが東京農業大学世田谷キャンパスにて開催された。

全体テーマを「理想のチームづくり～人づくりを勝つことにつなげるには」と題したセミナーの冒頭を飾ったのは、川本和久氏（福島大学）による「選手づくりは人づくりから」と題した基調講演。川本氏が指導にあたる福島大学陸上競技部は、主に女子短距離や跳躍競技の強豪校として、全日本選手権など多くの大会で好成績を残すだけでなく、同大卒業の池田久美子選手（スズキ・走り幅跳び）など、日本記録保持者も輩出している。

川本氏は、競技を実施していくうえで選手個々が立てる目標設定の単位を、10年先（長期）、3～5年（中期）、短期、それ以外の4項目に分類し、「長期目標を持つのが全体の3%、中期目標を持っているのが10%、あわせて13%にすぎない。

『うちの選手は目標を持ってない』と嘆くのではなく『目標など持っていないで当たり前』と思えば余計な苛立ちも起こらないはず』と話す。選手個々の自己実現が達成されるように、それをサポートするのが指導者の仕事であり『何でできない（勝てない）んだ』と言っているうちは、教えているとは言えない』と説く。

自己実現の大きな要素となる「勝つこと」は、分相応によって生み出されると川本氏は言う。では分相応とは何を指すのだろうか。

たとえば「5年後には東北で勝つたい」と思う。それならば「どうしたら勝てるのか」を考え、実際に勝っているチームや選手を観察し、自分との違いは何かを見つける。自分が今どのくらいの力があって、何を指すかを明確にしてこそ、すべきことや観察すべき相手が決まる。それが分相応なのだと言いき、自分が目指す場所にいる選手を観察して、その人が何をしているか徹底的に真似をするのが第一段階。そしてそこから違いをみつけて、違いを磨いていくのが第二段階』と示唆する。

選手たちに対しても、日々の生活から「すべての責任は自分で負いなさい」と話し、「人間的成長がなければ、パフォーマンスも上がらない」と言う。指導者も同様で、選手に対して「できることとできないことを示すことは大切なこと」と川本氏。「1000円の商品を300円しか持たずに買おうとしても買えるはずがない。1000円を持ってこないといけなんだなと気づかせるのが指導者の仕事と言えるのではないか」。

個人種目である陸上競技とはいえ、大学という1つのチームとして活動する集団であり、リレーもある。チームをつくるための不可欠な要素として、川本氏は「挨拶をする、返事をする、後片付けをする」という3点を挙げる。「結束力が上がれば、自然と選手たちが組む円が縮まっていく。少しずつの変化でいいから、

自分が接する時間のなかで選手たちを変えていくこと。それが人づくりであり、チームづくりにつながるのではないかと締めくくった。

続いて講演したのが、新体操選手としてロサンゼルス、ソウルオリンピックに出場し、その後はコーチとして後輩たちの指導にあたる秋山エリカ氏（東京女子体育大学）。

「人づくり」というテーマから、自身が選手時代に実際に目にしてきたという、旧ソ連やブルガリアなど、社会主義国の「選手育成マニュアル」について触れた。このマニュアルは1ページ目に「スポーツ選手の目的は金メダル獲得だ」と記されており、技術だけでなくメンタル面や栄養、家庭での過ごし方など幼少期から、新体操で超一流選手になるための年間メニューや月間、週間メニューが細かに記されているそうだ。「選手を徹底管理して『つくる』ことも必要なかもしれないが、私自身は選手と一緒に考えながらでなければチームはつukれない」と秋山氏は言う。

まず選手の指導にあたるに際し、秋山氏は選手に対して「どんな選手になりたいの？ 目標は何？ あなたは何になりたいの？」と問う。そしてこの返答がない限り、練習を始めない。「選手が何を指すのかわからなければ、コーチも何を指導したらいいかわからない。同じ目的を持っていることを確認し合って、初めて同じ方向に進むことができる」。

現在に至るまでインカレ57連勝と圧倒的な強さを誇る東京女子体育大学新体操部。部員数は100名を超

え、華やかな役割を担う選手もいれば、目立たぬところに甘んじなければならぬ選手もいる。

そんなチームをまとめるための1つの方法として、秋山氏が行っているのはごくシンプルな問いかけ。

6人グループをつくった選手たちそれぞれに「衣食住以外で無人島に何を持っていく？」と聞く。携帯電話やペットなど独自の答えを挙げる選手たちに「それで私をもてなすとしたら、どうする？」と問う。それぞれの持ち物を駆使して、さまざまなアイデアを挙げる選手たちに対して秋山氏が言うのはひと言。「それは6人が別々のものを持っていたから、多くのもてなしが生まれるんだよね。役割は1つじゃないということだよ」。今いる集団で何をすべきかという点を選手それぞれに植え付けることで、「自分なんて」という発想を消していくのがねらいだそう。その他にも、努力と能力の掛け率が高い選手を試合に選ぶというように、選手選考基準も明確にすることで選手たちを納得させ、役割を再確認させるなど、自身の選手時代の経験も活かした指導法が披露された。

午後には、川本、秋山両氏にSSOメンバーを交えてのディスカッションも繰り広げられ、さらに企業との関係も重視するSSOらしく、展示企業であるアークレイ、シスメックス各社からの情報提供の場も設けられた。コーチだけでなく、トレーナーや企業など垣根を越えたネットワークづくりが垣間見えるセミナーとなった。今後もスポーツ現場に関わる人たちにとって有用な情報交換の場となり得るような、セミナーが開催されていく予定だ。

## ●トップリーグ

### 活性化に向けた普及と強化

2003年からトッププレイヤーの強化、ラグビーファン拡大への牽引、日本ラグビー水準向上への貢献、企業スポーツ振興・地域との協働によるスポーツ振興の達成を目指し、始動したのがラグビートップリーグ。去る8月21日には赤坂プリンスホテルにて9月1日の開幕を控えた2006-2007トップリーグプレスカンファレンスが開催された。

過去3回のトップリーグと今回が異なるのは、プレーオフ制度が導入されたということだろう。これまでは総当たりによる勝敗（勝敗数が並ぶ際はトライ数が多いチームが勝ち）によってリーグ王者が決められてきた。しかし今回からは、リーグの上位4チームによるプレーオフを「マイクロソフトカップ」と銘打ち、トーナメントで勝ったチームがリーグ王者となる。一度負けたら終わりというトーナメント制を導入することによって、より熱い試合を見せることを、今回のプレーオフ制度導入のねらいとしている。

日本における最高峰のリーグとして謳う以上、チームの勝敗だけでなく、競技全体の普及を考えることもトップリーグに関わる選手関係者に求められる。各チームの監督も、ただ漠然と「ラグビー」を見せるのではなく、それぞれのようなカラーを打ち出していかという問いに對

し、「多くの人たちがラグビーの魅力はトライであると感じていると思い、より多くのトライを量産したい」（ワールド・ピーター・グリック監督）、「倒れずに立って進み続けるスタンディングラグビーを完成させることによって、ラグビーの魅力を多くの人に感じてほしい」（東芝府中・薫田真広監督）とそれぞれ答えた。さらに今季からサントリーサンゴリアスで指揮を執る、清宮克幸監督はカンファレンス当日に行われていた甲子園決勝を例に「誰が見ても心動かされるような奇跡を起こし、感動を呼び起こす。そんな試合を見せることが、ラグビー人気や観客動員にもつながっていくのではないか」と示唆した。

昨年、一昨年のトップリーグを制しただけでなく、昨年はリーグ、マイクロソフトカップ、日本選手権（※選手権はNECと両チーム優勝）を制し、三冠に輝いた東芝府中ブレイブルーパスの富岡鉄平キャプテンも、チームとして昨年以上の成績（勝敗）を残すということだけでなく、「いかにこの競技を多くの人に見てもらおうか」という点についても次のように語る。

多くのチームがラグビー人口拡大



トップリーグを盛り上げる全14チームの選手たちとキッズレポーター

## ON THE SPOT

に向けた取り組みとして、ラグビークリニックなどジュニア層に対してのアプローチを実施してきた。地道な取り組みの結果、多くの子どもたちがラグビーやラグビーを楽しみ、競技場にも足を運ぶようになったことは事実だ。しかし「子どもたちだけでなく、僕たち選手と同年代の人たちに対しても、もっとアプローチしていかなければ本当の意味での普及活動にはつながらない」と富岡キャプテン。ラグビーを好きだという人たちだけでなく、より多くの人に見てもらうために、何ができるか。そのさらなる努力が問われると最強チームを率いるキャプテンは進言する。

今シーズンはリーグ初のナイターによる開幕戦の実施や、関東や関西だけでなく各地方で13週にわたり全91試合を実施するなど、これまでにプラスした新たな試みが入り入れられることになった。ラグビーに限らず、いかにして多くの人たちにその競技の魅力を伝えるか。現場からどのようなアプローチができるのか。限られた枠を超えた、本来の意味での「普及」を進めることは、多くの競技にとっての課題であることは間違いないだろう。

### ●スポーツ産業

## スポーツのブランドマーケティングを考える

去る7月22、23日の2日間にわたり、日本スポーツ産業学会第15回大会が開催された。22日には同学会の学生会員を対象としたキャリアフォーラム、23日には今大会のテーマとなった『ブランディング』についての基調講演、シンポジウム等がそれぞれ行われ、会場となった順天堂大学有山記念講堂(東京都文京区)

はこれからのスポーツ産業を担うであろう多くの学生で賑わった。ここでは、スポーツにおけるブランディングをどのように理解し、どのように実践しているかについて、プロスポーツ・リーグ、あるいはイベント・プロ

デュースに携わっている立場からの報告と今後への展望と課題を討議したシンポジウム、「スポーツにおけるブランドマーケティングを考える」について紹介する。

このシンポジウムでは、富田正一・国際アイスホッケー連盟副会長、河内敏光・(株)日本プロバスケットボールリーグコミッショナー兼代表取締役社長、村林裕・FC東京専務取締役、北村純・中部日本放送(株)第47回中日クラウンズ事務局長の4氏がパネリストを務めた。

まず富田氏は、2003-04シーズンよりスタートしたアジアリーグアイスホッケーの現状とアイスホッケーの普及に向けた取り組みなどを報告した。現在同リーグにはスウェーデンの財政イベント会社が出資するノルディックバイキングス(中国)が参加するなど従来なかった動きが出ていることから、富田氏は地域住民に支えられるチームづくりに加え、アジア全体でレベルアップを目指していく新しいマーケティングを行う必要があると指摘した。そのうえで、「(リーグとして)カンパニーをつくらないといけない」と述べ、財団法人主体のスポーツから株式会社主体のスポーツへ転換していくべきとの見解を示した。

続いて、株式会社としてプロリーグを運営に携わる河内氏は、bjリー



順天堂大学有山記念講堂で開催された日本スポーツ産業学会第15回大会

グの理念と今後の展望を紹介した。bjリーグでは、3世代をターゲットにして会場を満員にしていく方針を立て地域密着・国際交流を図っている。観客を引きつけるうえでスポーツの「エンタテインメント」性を高めることは重要となるが、河内氏は吉本興業とコラボレートして演出に工夫を凝らす大阪エヴェッサを例に挙げ、地域に合った会場の雰囲気づくりなどに力を入れていることを強調した。そして、それを推し進めるリーグが株式会社だからこそ、「運営する側も含め、リーグに関わるすべての人間がプロフェッショナルにならなければいけない」と言う。

FC東京の村林氏は、主に地域における活動について触れた。『強く・愛されるチーム』を目指し活動しているFC東京では、東京に根ざしたチームとなるため、地域のイベントにてミニゴールを用いたPKベースを設けたり、スタッフが試合前に地元の駅前にてチラシ配りを行うなどファンとの接点を積極的につくっている。また、知的障害者を対象としたサッカー指導の場を設けたり、ボランティア組織による試合会場のゴミ拾いが実施されるなど、スポーツのよりよい環境づくりにも努めている。「ただ愛されるだけでなく、強いチームをつくることも自覚しなければならない」とも話したが、幾

度も聞かれた「社会の一員」という言葉が印象的であった。

日本で一番古いゴルフの民間トーナメントである中日クラウンズの事務局を務める北村氏は、主催であり、メインスポンサーであり、マスメディアでもあるという立場から話を進めた。1960年に中部日本招待「全日本アマプロゴルフ選手権大会」としてスタートした中日クラウンズは、東京・大阪・名古屋を結ぶ初のテレビ全国ネット中継されたテレビ中継放送の原点となるが、本物のゴルフを見せる、格調高い大会運営と美しさの追求、質の高いテレビ中継などが今年で47回を迎える同大会のこだわりである。グローバルに活躍する海外選手の参加もあり高い評価を受けているが、北村氏は「関わる企業・主催者が高い理念とコンセプトを持ち、マスメディアが真摯に伝えていく。そして、業界全体が競技のブランドデザインを国際的な交流の中で考えていく必要がある」と締めくくった。

それぞれ異なる立場からスポーツのブランドマーケティングについて語られたが、4氏の話から、チームやリーグ、イベントの運営に携わる人間が明確なビジョンを持って行動を起こさない限り、どんな手法を用いてもブランドは確立されないと断言することができる。これは当然の話とも言えるが、新たなブランドをつかっていく、あるいは今あるブランドをこれから高めていく立場を目指す人にとって必要な心構えを再認識する機会となったのではないだろうか。

## ●野球

### クラブの今後に向けた土壌づくり

37年ぶりの再試合となった決勝

戦など、熱戦の続いた高校野球。球児たちが甲子園を舞台に戦った8月、栃木県足利市、愛媛県松山市でも2つの野球の全国大会が開催された。

去る8月10～13日までの4日間にわたって開催されたのが「第31回全日本クラブ野球選手権」。北海道から大分まで、全21チームが足利市総合運動公園硬式野球場に集い、熱戦を繰り広げた。

クラブ野球の場合、まず注目すべきはそれぞれのチームの活動形態である。企業チームを母体にしており、活動場所が確保されたチームもあれば、学生から社会人までそれぞれが全く異なる生活環境のうえに、練習場も確保できないという状態で日々の練習に臨むチームもある。

昨今では高い目標を掲げて結成され、毎年セレクションを実施し、昨年は同大会で優勝、プロ野球選手も輩出したNOMOベースボールクラブや、地域密着の独立リーグ構想から生まれた岩手21赤べこ野球軍団など、「野球をする場所がない人たちが活動する場」としてのクラブではなく、より高い目標を掲げながら活動する場としてのクラブが増えてきたことで、大会に出場する選手たちやチームのレベルも年々向上している。

本誌2005年3月号「クラブで指導する」でも取り上げた北海道ベースボールクラブ「札幌ホーネッツ」も2年ぶりに同大会に出場。惜しくも2回戦で敗退するも、伊藤晋監督は「限られた練習環境のなかで何ができるかということを個々が考え始めたので、不平不満を述べるのではなく、今できる課題に対して取り組

み成長する姿がみられるようになった」とクラブとして着実な成長を遂げていることを示した。

第31回のクラブ選手権を制したのは和歌山箕島球友クラブ。箕島高校のOBを中心に結成された同クラブで監督を務める西川忠宏氏は、企業チームでもなく、学生チームでもない「クラブ」という形態で活動することについて「厳しい面はあるけれど、ただ楽しむだけでなく、チームとして野球をするためには何が必要かを選手たちが考えてつくっていくことが、最大の利点なのではないか」と話した。

続いて8月16～19日までの4日間にわたり開催されたのが「第2回女子硬式野球全国大会」。昨年の静岡での開催に引き続き、ベースボールフェスティバルの一環として、女子硬式野球の全国大会を開催。第1回目から4チーム増えた全20チームが「マドンナスタジアム」での戦いに臨んだ。

クラブ選手権同様に、女子野球全国大会に出場しているチームも、中学、高校、大学の野球部、地元で活動するクラブチームなどその活動形態はさまざま。そしてそのチームを率いる指導者も、ソフトボール経験者の女性教師から元プロ野球選手



高レベルでの熱戦が繰り広げられたクラブ野球選手権

## ON THE SPOT

まで、実に多彩な顔ぶれである。

数少ない高校での「女子硬式野球部」として活動する、駒沢女子高校の監督は蘇武秀子氏。蘇武氏自身は大学までソフトボール経験はあるが、野球経験はない。当初は「野球独特の『間』をどうすればいいか戸惑った」と言うが、ソフトボールとはまた違うより多くの広がり、選手同様魅せられたそうで「女の子たちの楽しい野球をもっともっと広げたい」とこれからに向けた豊富を語る。

日本初の「大学女子硬式野球部」となった尚美学園大学。同大学の選手を主体に、今回の全国大会に臨んだ「尚美ドリームス」を率いるのは同大監督も務める新谷博氏。投手として西武ライオンズで活躍した新谷氏は女子野球の魅力「とにかく純粋に『野球が好きだ』というところ。昔は野球界全体がその思いのもとで活動していたけれど、プロなど取り上げられることに慣れてしまうと、一番シンプルなものを忘れてしまいがち」と語る。大学の野球部として女子野球を牽引することで「尚美でやってみたいと思わせるような存在でなければならない」と今後に向けた課題と決意を語る。

今から2年前の2004年に野茂選手がNOMOクラブを設立した際に掲げていたのは「野球を続けたいと思う選手たちが活動する場所をつくりたい」という思い。その大きな一歩が少しずつ足跡を刻み、場所は確実に増えつつある。女子選手たちも同様だ。「野球が好きで女の子たちが、野球を続ける場所がほしい」、尚美学園のように大学でも野球を続けられる環境が育ち始めたこれからは、競技としての根を張ることができるかどうかの真価が問われていくだろう。大いに盛り上がった甲子園と同様に、

クラブチーム、女子選手、野球界全体が大いに盛り上がっていくための着実な土壌づくりに期待したい。

### ●トレーニング指導

## JATI 関東支部第1回ワークショップ開催

日本トレーニング指導者協会(JATI)の関東支部第1回ワークショップが、去る8月27日、総合学園ヒューマンアカデミー東京校(東京都新宿区)で開催された。

最初に、ワークショップ1として「トレーニング指導者としての成功とよりよい指導のために」と題して、有賀誠司氏(東海大学スポーツ医科学研究所)が講演を行った。トレーニング指導者のあるべき姿について、指導者は選手に対して背中語る、つまり行動で規範を示すべきであり、業務を通じて職業倫理を確立していく必要について述べ、実際の業務で求められるトレーニングプログラムの作成や運用の方法、その具体例についてまとめた。また、パーソナルトレーナーやストレングス・コンディショニングコーチの活動事例を挙げ、雇用にはいる情報がどのようにもたらされるか、あるいは顧客獲得、さらにはトレーニング指導者の職域を開拓していくための長期的方策を挙げた。

次に、ワークショップ2として「敏捷性トレーニング」と題して有賀雅史氏(昭和大学)が講演。スポーツの特異性に合わせて、「敏捷性は素早く、爆発的に、瞬間的に動くこと。敏捷性を強化するために、生理学的な強化のほか、動作全体を意識したトレーニングが必要になる」と述べ、そのためのアプローチとして筋力とスピードの積であるパワーを伸ばし、ボディバランスを改善し



トレーニング指導の関係者や学生らが参加したJATIのワークショップ

て重心のコントロールをしていくこと、そして爆発力の強化のためのクイックリフトの重要性について話した。さらに、「もう1つのアプローチ」として、武術的なクイックネスを挙げ、床反力の利用を最小限にしながら重力加速度を最大限に利用する身体の動かし方を紹介した。

最後に「JATI 発足——トレーニング指導者のために」と題したシンポジウムが行われ、事業として6つの領域(教育、普及、資格認定、雇用促進、交流、調査・研究)を順次紹介し、参加者からの質問と提案に、理事でもある講師の2人が答えた。

今年設立となった新しいトレーニング指導者団体であるJATI。現段階での案として、会員が仕事をしていく上で法律面や会計、契約などで不利にならないような助言を得られるようにしたり、他団体との連携や資格制度の概要、さらに雇用促進などについて紹介され、トレーニング指導者の地位向上に向けた取り組みの方向性が示された。特色として、会員間の横のつながりを大切に相互交流を活動の基盤としたいとしている。

今後の予定として、全国の各支部でワークショップが開催され、普及活動が行われるほか、10月9日には設立記念式典、来年4月には第1回総会が開催される。有賀誠司氏は「手づくりの団体」と話すが、こういったトレーニング指導者自身による団体の活動にこれから期待したい。